

〔兼載雜談〕一物の上手にならむ事大事也、碁打重阿に、ある人兄弟ながら先にて碁うてるに勝負なし、又人重阿に、兄弟碁の事をとふに、兄まされりと答ふ、人皆云、いづれもせんにてうつに、兄のまさるといふはいかんといひしに、重云、弟は打手さだまりて、はや我流と見えたり、其流と見えば、はやすぐる、事有まじきといふ也、面白き詞也。

〔技癢錄〕碁有別才

家先生嘗謂一碁客曰、碁有別才、必重遲駭洽、而善之、如夫輕俊浮慧、神氣颯越、不能入碁格也、余○南伯民初以爲戲、後讀史、云唐李重恩善奕、形神昏憒、人謂之李憨、碁外一無所曉、對奕昏睡、但開目隨手、應出人意表、余以其有暗合也、不覺抵掌、按宋又有王憨、工碁能與劉仲甫角。

〔隨意錄〕圍碁之術、虛實損益、奇計百出、頗似有智謀者矣、博物志云、堯舜以子愚故、作圍碁以教之、其法非智不能也、此張華之說、固傳會耳、且世之善此技者、未必有智之人、其於世事之計、則反愚者多焉、又且總角幼童、未曾修鍊、而得其妙工、亦往往有焉、是亦理之不可解者也。

〔陰德太平記十三〕備雲石武士變志事

忠興○細大内尼子ノ勝敗ハ、其理適當シテ覺エ候、○中夫棋ヲ圍ミ候ニ、下手ナル者ハ、三石モ五

石モサキニ置テ打候ヘバ、上手ニモ勝事ニ候、然ル故ニ天下ノ碁所ニモ、或ハ上手ノ手相ヲ免シ、

又ハ先ニツ三ツナド定メ候、晴久ハ將ノ器ヲ比喩セバ、當時日本ニテハ上手カ、先々先ノ手相

マデハ下リ候ハジ、更バ誰ヲカ碁所ト定メ可申ヤ、○中サテ先ニ申ス如ク、元就ノ武勇棋ニ比セ

バ、國手ニテモアレ、上手ニテモアランカシ、敵手ニ五石六石、乃至星目置セヌレバ、勝ヲ取事ハ稀

ニシテ負ル事ハ多シ、晴久ハ先々先ノ碁ニナシテ、元就ノ碁所ニ對セバ、手相ハ先ニツナラン乎、

其軍勢ハ二十倍シヌ、多少ヲ論ゼバ碁ノヒジリ目ヲモ、杳ニ過タリ、先々モ、或ハ先ナドノ敵手ニ

聖目モ置セタランハ、勝ナン事ハ希有ニシテ、敗績ノミ多カルベシ、是ヲ以テ思ヘバ、元就ノ分際